第Ⅲ章　総括

第１節　生目21号墳の墳形について

発掘調査の結果、生目21号墳の墳丘、周溝は大きく撹乱を受けていることが明らかになった。特に前方部は削平が著しく、立面形の復元は不可能であるため、本節では墳丘平面形の復元のみをおこなうことにした。第44図が21号墳の墳丘平面復元図である。前述の理由から段築や墳頂平坦面の形状は復元できないため、墳丘外形の復元のみに止まっている。墳丘の復元に当たっては、沼澤氏の24等分値企画法（沼澤2005）を参考にした。北側周溝は後円部西側を除いて比較的良好に残存しており、墳端の位置を捉え易い。特に北側くびれ部から38号地下式横穴墓が構築されている地点までは、後円部墳端の円弧が明瞭であり、そこから復元される後円部径は22mとなる。前方部はくびれ部から隅角に向け周溝が徐々に浅く狭くなり、隅角で収束するため墳端が不明瞭であるが、前方部長14m、前方部幅18mに復元される。前方部前端は、周囲が削平を受けているため位置の復元が困難であったが、41号地下式横穴墓の玄室が周溝外縁下に構築されているとの想定で位置を復元した。これらの復元により墳長は36m、くびれ部幅11mとなる。後円部径と前方部長の比率だけをみると生目14号墳と近似する値であるが、くびれ部幅、前方部幅は21号墳が広く、平面形は大きく異なる。くびれ部から前方部隅角に向け大きく開く、いわゆる撥形の前方部となる。

周溝の平面形は墳丘形状に沿った鍵穴形であるが、後円部側の周溝が幅広く深い。前述のとおり前方部側ではくびれ部から前方部隅角に向け徐々に周溝が狭くなり、前方部隅角で一旦周溝が収束し、前方部前面の周溝は浅い区画溝程度である。これは橋本氏によって「九州南部型前方後円墳」の一つの特徴（橋本2012）として挙げられている周溝形態である。生目古墳群では生目3号墳、5号墳、14号墳が類似する周溝形態であり、橋本氏は7号墳も含めている。これらの前方後円墳の墳丘形態は各々異なるが、4世紀前半の21号墳から5世紀後葉の7号墳まで踏襲される周溝形態は、生目古墳群において前方後円墳を構築する上で重要な要素であったと考えられる。

第２節　生目21号墳の出土遺物について

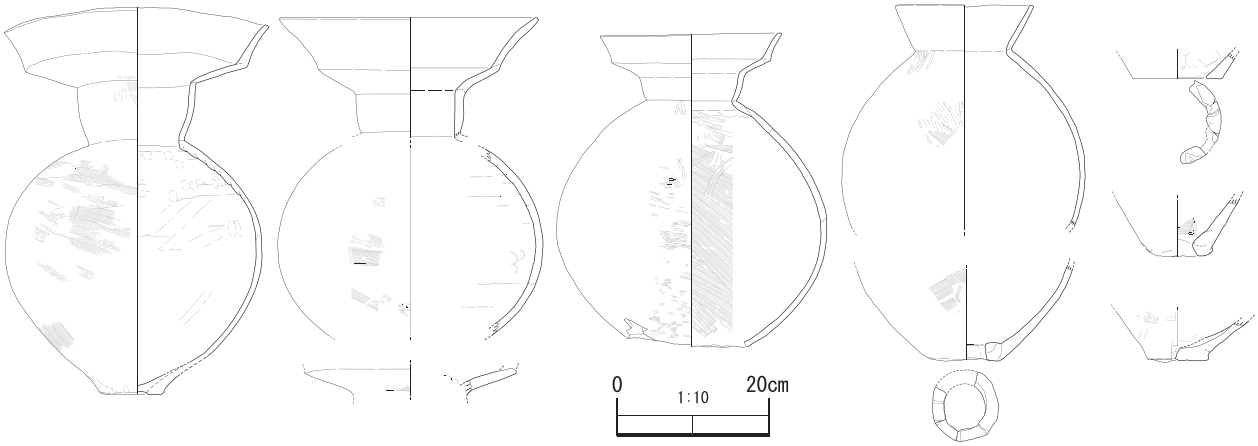
生目21号墳からは墳長36mの小型前方後円墳としては多くの遺物が出土している。しかしその大半は、周溝内に寄生する地下式横穴墓や、周囲に存在する21号墳構築以前の遺構に帰属する遺物であり、確実に21号墳に伴う遺物量は多いものではない。尚且つ墳丘が大きく削平されているため原位置を留めている21号墳に伴う遺物はなく、いずれも周溝内に転落した状況で出土している。周溝出土遺物の中で21号墳に伴う可能性が高いものは12 ～ 18の二重口縁壺、壺形埴輪である。また43号地下式横穴墓において再利用されたと思われる二重口縁壺（82）も、本来は21号墳に伴う遺物と想定される。個別の記述は前章でおこなったため再記しないが、12、14、82のエンタシス状の頸部や12、16 ～18の底部形状をみると、近接地では西都原13号墳出土資料が近似する。底部のバリエーションが、無穿孔、底部未充填による穿孔、積み上げ成形による穿孔（西都原13号墳の12-30は積み上げ成形の範疇に含めた）と雑多な状況である点も一致する。また二重口縁壺に加え単口縁壺が墳丘に樹立されていたと想定される点も同様である。生目古墳群では、21号墳に後出する14号墳、5号墳の壺形埴輪においても単口縁と二重口縁が共伴し

地下式横穴墓検出ライン

地下式横穴墓置土検出ライン

0　1:250　10m

第44図　生目21号墳平面復元図(S=1/250)



第45図　生目21号墳に伴う二重口縁壺・単口縁壺・壺形埴輪(S=1/10)

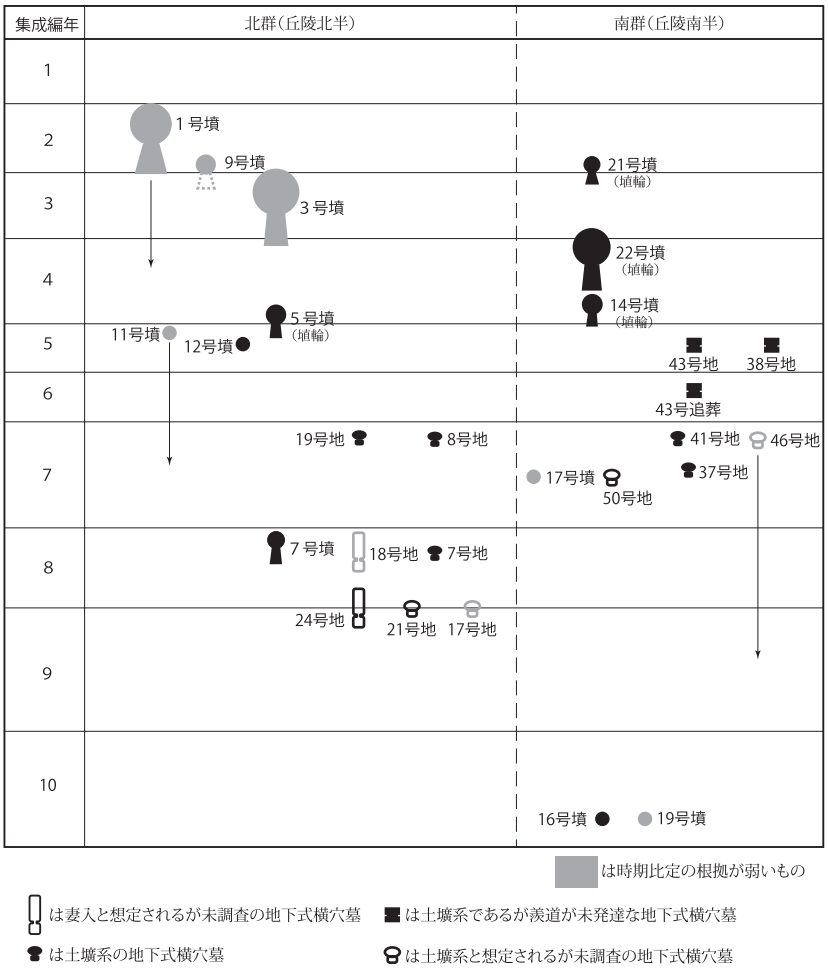
ており、21号墳に始まる系譜と考えられる。西都原13号墳は久住編年ⅢＡ期に位置付けられており（久住2010）、集成編年では3期に相当する。集成編年2期後半～3期の21号墳に僅かに後出する資料であり、宮崎平野部における本段階の古墳祭祀の一端を示しているといえる。

第３節　生目21号墳周溝内の地下式横穴墓について

生目21号墳の周溝内からは13基の地下式横穴墓が検出された。すべての地下式横穴墓の調査をおこなったわけではなく、不明瞭な点も残るが検討をおこなうことにする。Ⅰ期（５世紀初頭）には38号、43号地下式横穴墓が構築される。両者共に竪坑と玄室の幅がほぼ等しく、羨門が未発達の形態を呈する。玄室内の出土遺物は43号地下式横穴墓において玉類が出土しているのみで、副葬品が乏しい点も共通する。その構築位置は38号地下式横穴墓が後円部の中心を意識した主軸直交位置、43号地下式横穴墓が左くびれ部と前方後円墳の構造を意識した位置であることが注目される。Ⅱ期（5世紀前葉）には43号地下式横穴墓の追葬がおこなわれる。Ⅲ期（5世紀中葉）には41号地下式横穴墓が構築される。38号、43号地下式横穴墓と異なり羨道が明瞭な土壙系の地下式横穴墓である。小型の玄室にも関わらず、多量の鉄器、玉類が出土した。出土した鉄器は、津曲氏が生目古墳群の地下式横穴墓の傾向として指摘したとおり農耕具が目立つ（津曲2015）。また小型丸底壺を重視すれば46号地下式横穴墓がこの期に属する。Ⅳ期（5世紀中葉～後葉）には未調査であるが、検出時に出土した小型丸底壺から37号地下式横穴墓が構築されたと想定される。

38号、43号地下式横穴墓の構築年代が5世紀初頭に位置付けられることによって、加久藤盆地の小木原・蕨地下式横穴墓群における地下式横穴墓の成立との時間差が解消された。横口式土坑墓である蕨ST1007は38号・43号地下式横穴墓と形態が類似し、従来は43号地下式横穴墓の祖形として捉えられたこともある。しかし、小木原・蕨地下式横穴墓群において、この形態の横口式土坑墓は主体的ではなく、他の横口式土坑墓と異なり竪坑と玄室の床面が同レベルとなっている点、出土遺物がないため遺構そのものの時期は不明瞭である点も考慮すると、むしろ38号・43号地下式横穴墓が蕨ST1007に影響を与えた可能性が指摘できる。一方で、いわゆる土壙系の地下式横穴墓は、出現期まで遡る事例が現段階では生目古墳群は確認されていないため、この点においては小木原・蕨地下式横穴墓群から生目古墳群への影響が想定される。このように、地下式横穴墓の成立には両地域間の相互作用が関わっているものと思われる。この背景には、柳沢氏が指摘しているように、倭王権によっておこなわれた南九州における朝鮮半島交渉に関わる軍士の徴発が、4世紀代の後半までは地域の盟主であった生目勢力を通しておこなわれた可能性があり、生目勢力と加久藤盆地の勢力が共に北部九州や朝鮮半島の横穴系の墓制に触れる機会を得ていたためと考えられる（柳沢ほか2011）〈註1〉。また38号、43号地下式横穴墓にみられる羨門が不明瞭な地下式横穴墓は、その後継続して構築されていないため、南九州における横穴系墓制の導入期に限定してみられた形態と考えられる。

生目古墳群における地下式横穴墓という横穴系墓制の導入は、前方後円墳周溝内に構築されるものの、新規に墳丘を構築することがない「中間層」とでも呼ぶべき階層から始まり、横穴式石室が首長墓である前方後円墳に導入される北部九州や、当初は下位階層である土坑墓を構築する階層に地下式横穴墓が導入される加久藤盆地とは異なる結果となった背景を検討する必要がある。



第46図　生目古墳群主要古墳・主要地下式横穴墓変遷図

第４節　生目21号墳と地下式横穴墓

以上のように21号墳周溝内の地下式横穴墓は、5世紀初頭に構築が開始されて以降、5世紀後葉まで継続的に構築されている。21号墳の築造時期が4世紀前半であるため、最初に構築された38号、43号地下式横穴墓との時間差は、短く見積もっても50～60年程度あり、当時では地下式横穴墓の被葬者が、直接21号墳の被葬者を認識し得た可能性は低い。21号墳は墳長36mの小規模な前方後円墳であるが、生目古墳群の南群で最初に築造された前方後円墳であり、「始祖墓」（土生田2010）としての役割を担ったため、小規模古墳にも関わらず、周溝内に多数の地下式横穴墓が構築されたと考えられる。50～60年という年代差は、世代に換算すると2世代程度であり、伝え聞いた始祖の墓に同族が地下式横穴墓を構築する、という図式と理解される。5世紀初頭から後葉までの約100年間に13基という数を鑑みると、血縁を有する同族である可能性が高い。

始祖墓とそれに付随する地下式横穴墓という観点からみると、土生田氏が挙げた他地域の事例とは異なり、始祖墓である21号墳のみではなく、後続する22号墳や14号墳においても少数ではあるが地下式横穴墓の寄生がみられることは、地域的な特性も含めた検討が必要といえる。

〈註 1〉津曲氏は土師器編年を再考し、小木原遺跡蕨地区の横口式土坑墓編年を見直した上で、横口式土坑墓の成立が北部九州において初期横穴式石室が出現する以前であることを提示し、横口式土坑墓と地下式横穴墓を分離して考えるべきとの見解を示している（津曲 2013）。

【引用・主要参考文献】
今塩屋毅行 2011「第Ⅳ章総括 Ⅳ古墳時代」『板平遺跡第 3・4 次調査』宮崎県埋蔵文化財センター。
大賀克彦 2013「2 玉と石製品の形式学的研究①玉類」『副葬品の形式と編年』古墳時代の考古学 4、同成社。
河野裕次 2015「宮崎平野南部における弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年試案」『宮崎考古』第 26 号、宮崎考古学会。
久住猛雄 2010「筑前地方における首長墓系列の再検討」『九州のおける首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会。
津曲大祐 2013「横口式土壙墓と地下式横穴墓」－宮崎内陸部における地下式横穴墓の出現をめぐる諸問題－、福岡大学考古学論集2。
津曲大祐 2015「地下式横穴墓の成立と展開」『第 12 回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室。
沼澤　豊 2005「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」『考古学雑誌』第 89 巻第 2 号、日本考古学会。
橋本達也 2012「3 地域の展開①九州南部」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学 2、同成社。
橋本達也 2014『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館。
土生田純之 2010「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第 65 集、九州古文化研究会。
柳沢一男ほか 2011『生目古墳群と日向古代史』宮崎平野の巨大古墳が語るもの、鉱脈社。